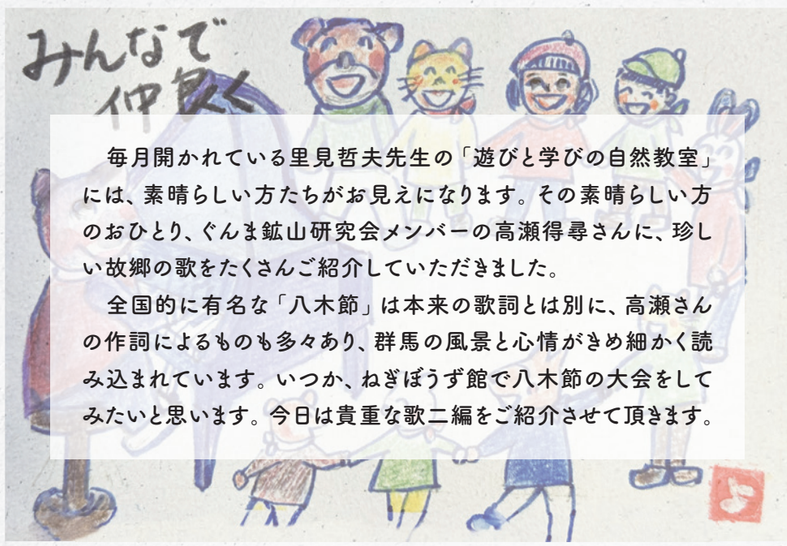
ねぎぼうず新聞 vol.12

女性村

2025 Newyear

画 田島葉子



毎月開かれている里見哲夫先生の「遊びと学びの自然教室」には、素晴らしい方たちがお見えになります。その素晴らしい方のおひとり、ぐんま鉱山研究会メンバーの高瀬得尋さんに、珍しい故郷の歌をたくさんご紹介していただきました。

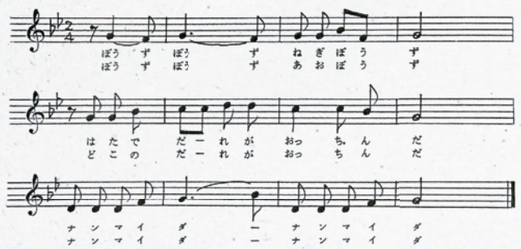
全国的に有名な「八木節」は本来の歌詞とは別に、高瀬さんの作詞によるものも多々あり、群馬の風景と心情がきめ細かく読み込まれています。いつか、ねぎぼうず館で八木節の大会をしてみたいと思います。今日は貴重な歌二編をご紹介させて頂きます。

歌は故郷のこころ

葱坊主

作詞：橋本暮村 ／ 作曲：横田金治

坊主　坊主　葱坊主
畑で誰が　おっちんだ
ナンマイダー　ナンマイダー
坊主　坊主　青坊主
どこの誰が　おっちんだ
ナンマイダー　ナンマイダー
坊主　坊主　葱坊主
畑にならんで　経読んだ
ナンマイダー　ナンマイダー



下仁田音頭

作詞：鈴木比呂志 ／ 作曲：八州秀章

一　桑のなかゆく、上信電車
着いた終点、チョイトおらが町
ひかる街並、見ておくれ～見ておくれ
ヨイヨイ下仁田、サッテモ下仁田、夢の町

二　神津、荒船、白樺招く
ミルク色した、チョイト雲招く
夢の牧場の、登山口～登山口
ヨイヨイ下仁田、サッテモ下仁田、山の町

三　味もほんのり、下仁田葱と
煮込蒟蒻、チョイト歯切れよさ
つつく晩酌、ほんのりと～ほんのりと
ヨイヨイ下仁田、サッテモ下仁田、山の幸

不思議な出会いが二件重なったパワースポット「女性村ねぎぼうず」

画家　近藤征治

1993年10月7日は私達25回目の結婚記念日。25周年記念旅行を北海道道南道東一周、旅行社に無理だと言われた四泊五日の強行ドライブ旅行を決行した。（函館～札幌～旭川～層雲峡～網走～知床～摩周湖～知床～摩周湖～釧路）

10月7日の記念日は札幌歓楽街「すすきの」の夜を楽しんだ。ビル地下にある「しゃぶしゃぶ食べ放題、ビール飲み放題」の店へ入った。隣の同年代のご夫婦と合流し、飲食しながら楽しい会話が続いた。酔いが回った頃、双方の身内話となった。ご主人は司法書士、土地家屋調査士の藤澤邦麿氏、札幌市内在住とのことだった。奥様の出身地を問答形式でお聞きしながらビックリ仰天だった。山口県萩市川上村長門峡近くの旅館向井のお家が実家だと言われた。実は1962年、20歳のとき、発電所工事のためにその旅館で寝泊まりしていたのであり、そしてその奥様の妹さんは私たちの工事現場の事務員をされていたのです。旅館前の橋の下は透き通った清流、その川底には鯉や岩魚などがたくさん泳いでいた。奥様は「子供の頃はその川で泳いでいました。本当に懐かしい。」と言って涙して感動されていた。話は弾み、「私たちの娘は作詞作曲家の森雪之丞と結婚しています。東京へお帰りになったら是非とも会ってやってください。」と申された。森雪之丞氏は作詞作曲家、80歳を過ぎた現在まで未だお会いしていない。

この度、日本子守唄協会 西舘好子理事長より、山口県周防大島から数名、下仁田施設を訪問される話があり、懇親会も予定しているので参加しませんかとのお誘いがあった。同時に元宮内庁長官 羽毛田信吾様もお出でになるとのことだった。そして東邦大学名誉教授で腎移植権威の相川厚氏等、錚々たるメンバーが出席する会、一時は躊躇したが、田原敬氏（歴史研究93歳）をお誘いして、参加することにした。

懇親会が始まり、アルコールが少々入ったところで、元宮内庁長官 羽毛田氏へどのようにお声がけ、お呼びしたらいいか迷ったので、「はけたさん」と呼んでいいですか?と訊ねたら「はい！ よろしいですよ!」とニコッとされたので、気兼ねせず、気さくにお話することができた。

興に乗ったところで、私から「羽毛田さんは山口県出身とお聞きしておりますが、山口県はどちらですか?」とお訊ねしたら、「萩市の川上村です」と仰ったので、もしかしたら北海道での藤澤奥様との出会いと同じになるのではと不思議な思いになった。話をすすめるうち、まったく同じ筋書きになったのである。どうしてこのような夢のような二つ重なった不思議な出会いがあるのだろうかと驚くしかなかった。嘘のような本当の話である。

西舘理事長にこの話をしたら、「ここは不思議なことが次々と起こるパワースポットですね!」と。

私にこのような不思議な出会いが多い!のは、何故だろう?

女性村「ねぎぼうず館」は**1月・2月は閉館**となります。
3月以降のイベント等につきましては、
決まり次第ホームページに掲載しますので、ご覧ください。

https://www.komoriuta.jp/ ▶

画 山元 絵津子

お申込み お問合せ先
NPO法人 日本子守唄協会事務局
TEL：03-6458-0283　FAX：03-6458-0284　E-mail：info@komoriuta.jp
https://www.komoriuta.jp/

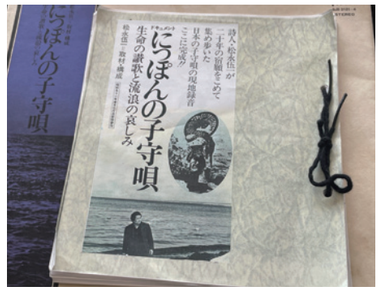
松永伍一と詩人の部屋

日本子守唄協会理事長
西舘 好子

下仁田というところは詩情の漂うなつかしい街です。

四方は山に囲まれ、縄文時代から火山の爆発でできた岩の山々は石の芸術を産み、川は長く伸びて恵方に向かっています。

ここは素晴らしい日本のパワースポットと専門家が折り紙つけてくれました。



日本子守唄協会は今年で設立25周年を迎えますが、その初代会長が松永伍一先生でした。生きていらっしゃれば95歳でしょうか。

松永先生を知る人は知っていても、ほとんど名前にはなじみがないかもしれません。

膨大な日本農民詩史で毎日出版特別賞をとり「一揆論」や「日本農民詩史」、キリスト教文化論・親鸞論など著者も多く、膨大な子守唄のレコードなど、資料は日本一、子守唄研究の第一人者です。

派手ではなく、また派手なこと、人に騒がれることを下品と思っている節もあります。

静かなたたずまいは女性的でありながら、九州男児の心意気で妙に男っぽい面もあります。

それが松永先生の本質なのだと思うようになってきました。

何を読んでも作品を流れているの風土の中の詩情です。白秋を慕い、九州の土壌の中に流れている言葉やリズムが松永先生の体にしみこんでいるのでしょう。

子守唄の会ではよく日本の悲しい子守唄を歌ってくれました。古賀政男が好きで、「心情のないところに詩は生まれないね、古賀さんの歌が本当の歌だ」と仰っていました。

その心が先生を慕う弟子や教え子や心酔する歌手や役者を育て動かしました。

下仁田の教室を「松永伍一資料館」にしたいと力を貸してくださったのは小学校の時の教え子、近藤征治さん、近藤さんの関係者で国見修二さん、貝塚津音夫さんなど一流の詩人たちです。窓から見える

景色は詩情を誘います。松永先生は知らなくても、詩人たちの殿堂になればいいと考えています。日本中の詩人たちがやってくるようにしたいです。今月は松永先生の弟子の山村樵人さんから300冊の詩集が送られてきました。詩の選者を務めた松永さんのもとに送られてきた詩集には丁寧な添削が施されています。

「偉大な詩人が去った後に」確か、中学の後輩の作家五木寛之さんが週刊誌にそんな追悼文を載せていました。下仁田にそっとたたずんでいる松永先生がいるように感じます。

皆様、どうか見にお越し下さいませ。

コスモスと謎の白いカレー

ガーデンデザイナー　多田 欣也

遠野東小学校までは数百メートル、もちろん歩きですが朝は近道しようと、宮本医院の中庭に隠れて裏木戸から忍び込みます、コスモスがいっぱい咲いていて花びらをちぎりヘリコプターだつーと言いながら向かいの修ちゃんとはしゃぐのですが、いつも先生に見つかり怒鳴られ走って逃げました。帰りはその隣のこうちゃんの家の庭を通ります、遠野一番の馬喰の大きな家で馬小屋もたくさんあります、その中の干し草を積んでいる小屋に忍び込みいい香りのする草の中に潜り込むのが大好きでした、バッタもいっぱいいます。しかしここでも世話人のおじさんに見つかり追い出されます、頭も服も草だらけで家に帰れば、また祖母に叱られるという毎日でした。

こうちゃんは二つ年上、兄と同級生なのでいつも遊んでもらっていました。二年生の時だったか、彼の誕生日会に兄と私も呼ばれました、ささやかな贈り物を持ち集まったほかの友達たちと家の内外でにぎやかに遊んでいると「お昼だよ、カレーライス食べよう」と、お母さんが呼んでくれました。大きなテーブルにはいい匂いのカレーの皿が人数分並んでいます、もちろん水の入ったガラスのコップにはスプーンがたっています。みんな席に着くとこうちゃんの前にはカレーがありません、お手伝いさんが「お腹が弱くてカレーは食べられないんだよ」と、「白いカレー」だと言って彼の前に置きました。「なんだべ、なんだべ？」、みんな初めて見る白いカレーが気になってしようがありません、そっちが食べたいとも言えず自分のカレーをお代わりしていっぱい食べました。

6年生の頃でしたか、給食にクリームシチューが出たとき「なーんだ」と、ようやく謎が解けた気がしましたが、白いカレーの真実はわかりません。

高校の文化祭の時でした、体育館の舞台に三年のこうちゃんがギターを持ち反戦歌であった「坊や大きくならないで」を、弾き語りしました、美しい歌声と詩の重さに皆拍手喝采でした。やがてみんな歳を取り、こうちゃんは去年70歳で病気で亡くなりました、白いカレーの真実はついに聞くことができませんでした。一方、今でも世界中で戦争が絶えることがありません、あの時の平和への祈りの歌は届かなかったのでしょうね？

画　多田 欣也